



Title	個人デザインコレクションの経緯に関する研究：織田コレクションを事例として
Author(s)	辻川, 愛理
Citation	デザイン理論. 2024, 83, p. 94-95
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/93431
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

個人デザインコレクションの経緯に関する研究

織田コレクションを事例として

辻川 愛理 滋賀県立大学大学院在学

研究背景

織田憲嗣氏（以下織田氏とする。）は、東海大学名誉教授・東川町文化芸術コーディネーター・椅子研究家であり、北欧を中心とした家具や日用品を、長年研究・収集されてきた。コレクションは、北欧を中心とする、20 世紀の優れたデザインの家具や日用品群で、「織田コレクション」と称され（以下織田コレクションとする。）、世界的にも高く評価されている。最初は椅子の収集のみであったが、その他の家具や日用品などの収集にも手を広げ、現在コレクションは合計で約 38000 点にのぼる。織田氏は日常で使われるようなデザイン作品を収集・研究されており、「暮らし」や「北欧」をテーマとしている。

また、織田氏は優れたデザインを次世代に継承していくため、2017 年に自身が収集した椅子のコレクションを東川町に公有化しており、建設構想中のデザインミュージアムにて、建築家の隈研吾氏の建築デザインなどと共に展示予定である。

従来、美術コレクションを対象とした研究が多く見受けられる中、デザインコレクションを対象とした研究はあまり見られず、また、織田氏や織田コレクションに焦点を当てた研究も見られない。これだけのデザイン資料を個人が収集し、価値あるコレクションを作り上げた経緯や背景に着目するべきだと考え、本研究は、個人が収集した織田コレクションの特色や形成の経緯を明らかにし、今後のデザインコレクション研究の進展に寄与する事を目的としている。

先行研究の検討

従来の研究では、個人デザインコレクションに関する研究は少ない。2007 年、大学コレクションとミュージアムに関する研究では、美術作品ではなくデザイン関連の所蔵品に特に着目している。デザイン資料の来歴や背景から時代の生活や経済状況が見え、資料としての価値が増すと述べているが、個人のデザインコレクションについては触れていなかった。

また、対象に設定した織田コレクションに関する先行研究は見当たらなかった。その他の個人コレクターに関する先行研究については、2012 年の小野秀雄関係資料に関する研究で、個人コレクターが自身のコレクションに対し、個人的な思い入れでなく学術的な意義などを持たせるためには、コレクションが偏向しないことが課題だと述べている。2012 年の根付コレクションに関する研究では、コレクターの性的特質によってコレクションの内容のみならず、その扱われ方が変わることを考察している。

世界のデザインコレクション、個人コレクターについて

日本には、公的なデザインミュージアムが未だ設立されていないが、海外ではいくつかデザインミュージアムが開設されている。ロンドンに位置するヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（V & A）は世界最初のデザインミュージアムと言われており、万国博覧会を由来として開設された。館の名前に「デザイン」が表記されている館は、ロ

ンドンデザインミュージアムや、ヘルシンキ・デザインミュージアムなどがある。ヴィトラデザインミュージアムは、家具メーカーヴィトラ社が所有する私立ミュージアムで椅子など様々な有名デザイナーの家具が所有されている。

世界で最初の個人コレクターはジェイムズ・ジャクソン・ジャーヴスと言われている。ボストン出身の美術コレクターで父親がガラス工場の社長であった。初期イタリア美術に関心を持ち、後に、単に見るだけでなく作品の研究・収集を始めた。

バーナード・ベレンソンはリストニア出身で10歳の頃、家族でボストンのスラム街に移住した。父親は貧しい行商人であったが、知人の紹介・援助によりハーバード大学で学んだ。生涯で収集した作品は200点以上で、それらの美術作品は家中に掛けられていた。

日本の個人コレクターでは、大原孫三郎と児島虎次郎を挙げる。大原美術館は事業家である孫三郎が設立したが、作品を実際に収集したのは画家の児島虎次郎である。三度にわたる渡欧を孫三郎に促され、制作に励むかわらでヨーロッパの美術作品を収集した。

織田コレクションについて

コレクション内容は椅子約1350脚（うち北欧4カ国800脚）、名作椅子図面オリジナル300点、テーブル70台、キャビネット50本、陶器3500点、ガラス器1000点、カトラリー類1300ピース、照明器具150点、バードハウス100点、オーナメント500点、関連書籍30000冊、その他雑貨数百点である。

織田コレクションを種類別に分け、それぞれの数量、合計と割合を分析した。コレクションは合計で38420点、最も多いのはポスターなどを含む関連書籍の30000点であり、コレクション全体の78%を占めた。関連書籍の割合が大きく、他の種類の割合ではほぼ0%になるものが多くなってしまうため、比較を行いやすくするために関連書籍を

除いた割合でも見ていく。関連書籍を除いた割合では、陶器、椅子、カトラリー、ガラス器の順で多く、41%、16%、15%、12%、であった。

また、コレクションの東川町文化財デジタルアーカイブで公開されていた540脚（2023年2月時点）の椅子のデータを用いて、年代別にまとめ、コレクションに偏りがあるかどうか、視覚的にはっきりと見て取れるよう年表を制作した。1920年以前、1990年代、2000年代の作品数が他より少なく10脚前後、1920年代～1940年代はそれぞれ約40脚前後、1950年代～1980年代はそれぞれ100脚前後であった。

考察と今後の展望

関連書籍が全体の78%を占めるが、椅子などのデザイン作品と比べ、手に入れやすく、価格が安価であることが考えられる。食器類が多いのは、シリーズで一式揃えると、枚数が多くなるためだと考える。織田氏は生活で使用できることを重視しているため、食器類はできるだけシリーズ一式で収集しており、家族の人数分の枚数の食器類を収集されることを意識していた。こういった、ただ作品を手にいれる事を目的としていないことも織田氏の特徴だと考えられる。

椅子の年表の分析について、1920年以前、1990年代、2000年代の作品数が他より少ないのは、そもそもデザインの歴史がまだ浅く、19世紀末に始まったことが考えられる。東川町文化財デジタルアーカイブには、順次、椅子の作品データが追加されているため追加分を含めた年表も、今後作成する予定である。

今後はさらなる織田コレクションの計量分析と、新聞記事などの内容分析、織田氏へのインタビュー調査などを進め、考察していく。